

# 高等教育の国際化

## 評価およびパフォーマンス・インディケータ

マイケル・ページ\*

訳 青山佳代\*\*

---

### <要 旨>

---

本稿の目的は、高等教育における国際化の概念的な全体像を示し、国際化を評価するためのパフォーマンス・インディケータの提起である。

まず、グローバル社会のなかでの国際化の位置づけ、高等教育におけるグローバル化の影響を論じる。次に、パフォーマンス評価に関する概念の全体像、パフォーマンス・インディケータ、ならびにパフォーマンス評価モデルについて論じる。加えて、高等教育段階での国際化に関する文献レビューを行う。これらの分析を基にして、筆者による10項目の主要なパフォーマンス・カテゴリーならびに、それらに関連したパフォーマンス・インディケータの提起を行った。その結果として、高等教育における国際化は、非常に複雑なプロセスであり、大規模な教育改革を象徴していることも明らかとなった。

---

## 1. はじめに

本稿は、世界的規模の現象となっている高等教育分野の国際化を論じるものである。グローバル化を迎えた今、大学はこれまで以上に国際化していく必要に迫られている。本稿の目的のひとつは、「国際化とはなにか」という問いを論じることである。また、高等教育を評価すること(the assessment of higher education)も世界的な関心を呼んでいる。名古屋大学高等教育研究センター(以下、CSHEと表記)は、日本の大学の文化・文脈に

---

\*米国ミネソタ大学教育人間発達学部・教授

\*\*名古屋大学高等教育研究センター・助手

沿って積極的に高等教育の評価という課題に立ち向かっている。CSHEは、大学全体のパフォーマンスを評価するツールとしての「パフォーマンス・インディケータ」の研究という面で重要な役割を果たしている。

本稿では、これまでのCSHEにおける研究成果を基に、高等教育分野の国際化を、以下の3つの点に注目しながら、論じることを試みる。

- 1) 高等教育分野が国際化するためにもっとも重要な要素はなにか
- 2) パフォーマンス評価プロセスにはどのような要素が必要か
- 3) 高等教育分野の国際化に関して、鍵となるパフォーマンス・インディケータはなにか

本稿を執筆するにあたって、まず、ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、日本、そしてアメリカで書かれた国際化についての理論書を分析した。次に世界中のさまざまな大学において、国際化がどのように定義され、その評価がどのように行われるのか、といった実例を調査した。加えて、パフォーマンス評価およびパフォーマンス・インディケータのコンセプトを検討した。さらに、ミネソタ大学で25年間にわたり、国際的に教育者として活動してきたみずからの経験を回顧してみた。筆者は、これまでにカリキュラム開発、海外での学習、留学生および海外からの研究者、ならびに国際教育の組織化といった分野での多くの国際化プログラムについて所見を述べたり、参画してきた。本稿では、これらすべての統合を試みる。

本稿の構成は、以下の通りである。

- A) グローバル化と国際化の定義
- B) 高等教育におけるパフォーマンス評価
- C) パフォーマンス・インディケータとは
- D) 国際化に関する先行研究のレビュー
- E) 国際化のモデル - 「鍵となるパフォーマンス・インディケータ」
- F) 国際理解教育におけるパフォーマンス・インディケータ

## 2. グローバル化と国際化の定義

まず、グローバル化と国際化を区別することが重要であろう(Enders and Fulton, 2002)。グローバル化は、「世界が急速にひとつの経済的空

間に統合されていく一連のプロセス」と定義できよう(Gibson-Graham, 1996, p.121; cited in Stromquist and Monkman, 2000, p.4)。また、グローバル化は、「新しい技術によって、瞬時に世界的規模でのコミュニケーションのプロセスならびにその結果を可能する。その結果は、世界経済ならびに経済システムの統合ならびに相互依存が増加とともに、知識の量と入手経路の爆発的増加を引き起こしている」(Grünzweig & Rinehart, 2002, p.7)言及されている。ウォーターズ(Waters, 1995)は、グローバル化は、世界経済・政治および文化的状態である、と述べている。

これら3者の見解は、われわれの学生は急速な世界の変化に直面するであろうことを示している。このような状況に対して、論者の多くは、大学を卒業したものは、従前の伝統的な大学教育に加えて、国際的に広い知識と、豊かな文化交流に関するスキルをもつべきだと指摘している。グローバル化は、大学が、学生に教えるべきことを左右していることから、(グローバル化は)大学にインパクトを与えているといえる(Currie & Newson, 1998; Currie, DeAngelis, de Boer, Huisman, Lacotte, 2003)。

グローバル化が、世界的状態を示すのに対して、国際化は、大学のような組織もしくは団体を指す。国際化は、国際的な環境を創り出すことである。つまり、国際的な教育、研究、ならびに社会貢献などである。たとえば、世界のさまざまな地域の知見に触れさせることであったり、自分とは異なった国の人々とコミュニケーションし、ともに働くための準備を学生にさせることである。高等教育分野を例にえば、「国、産業部門、および機関レベルでの国際化は、国際的、異文化間、もしくは世界的規模の次元のものを中等後教育の目的、機能、ならびに提供へ統合するプロセスと定義される」(Knight, 2002, p.1)。

エリンボウ(Ellingbou, 1998, p.199)は、ナイト(Knight)の定義に対して、次のように補足している。「国際化は、国際的視野を大学のシステムに統合していく過程として定義できよう。それ(国際化)は、ますます多様化しながら、地球規模で絶え間なく変化している外部環境に対して、適切に反応ならびに適応している機関(大学)の内部力学の変化に対して、多くの利害関係者(ステイクホルダ)が関与している、ヴィジョンである。そのヴィジョンは、現在進行中かつ、未来志向的で、多次元的、そして学際的なリーダーシップによるものである」。この複雑な定義は、国際化には多くの特質があり、国際化は機関変化のダイナミックなプロセスであることを意味している。本稿の後半において、これらの特質を定義する国際化の

モデルの提示を試みる。

### 3 . 高等教育におけるパフォーマンス評価

私立ならびに公立の大学が、さまざまなステイクホルダによって、より説明責任が問われるにつれて、パフォーマンス評価もより重要なトピックとなってきた( Brennan and Shah ,2000 )。アービン( Erwin ,199 ,p .15; cited in Brown & Glasner ,1999 ,p .31 )は、パフォーマンス評価を「情報の定義、選別、デザイン、収集、分析、解釈、ならびに活用」からなるプロセスと定義している。評価プロセスの最終目標は、大学の目標( goals )と目的( objectives )と比較して、大学のパフォーマンスを改善することである。評価プロセスは、目標ならびに目的に到達するための手段を決定づけることができる。国際化の分野では、OECD( Organization for Economic Co-operation and Development; 経済協力開発機構 ) ( Knight & de Wit ,1999 )が、IQRP( the Internationalization Quality Review Process; 国際化に関する質的評価プロセス )を発表した。ナイト( 2002 ,p .1 )は、いたるところでIQRPについて、「大学が独自に定めた目標と目的に沿って、各大学が、国際化の特徴の質を評価し、強化していくプロセス」と記している。IQRPの評価は、国際化に対する政策、支援システム、教育プログラム、助成金ならびに外部資金、学生、調査研究の協力体制、人材開発プログラム、ならびに機会について行われる。IQRPのプロセスは、国際化の観点で評価を行い、上述の領域の検証を推進している。

### 4 . パフォーマンス・インディケータとは

パフォーマンス・インディケータは、パフォーマンスを評価していく過程において活用されるツールである。AUCQ( the Association of Universities and Colleges of Canada; カナダ大学協会 )では、パフォーマンス・インディケータを「大学システムおよびその一部が本来あるべき姿で機能しているかどうかを測定するための数値および記述による、政策に関連性のある統計資料」と定義し、USAID( the U.S. Agency for International Development; アメリカ国際開発庁 )の開発情報評価センター( 1996 ,p .1 )は、「パフォーマンス・インディケータは、進捗状況を測るため、および予測された結果と実際の結果を比較するために収集されたデー

タ」と定義している。パフォーマンス・インディケータは、分析のための実践ユニット、つまり機関のパフォーマンスを断続的に測定する手段といえる。

## 5 . 国際化に関する先行研究のレビュー

高等教育分野の国際化に関する文献は、少ないながらも着実に増えている。その顕著な例としてCallar(2000)、Crowther, Joris, Otten, Nilsson, Teekens and Wächter(2000)、Ellingboe(1998)、Green and Olsor(2003)、Grünzweig and Rinehart(2002)、Knight and De Wit(1999)、Mestenhauer and Ellingboe(1998)、Mestenhauer(2000a,2000b,2002)、Paige(1993)、Siaya and Hayward(2003)が挙げられよう。文献をレビューすることによって、国際化に関する非常に多くの側面を認識することができる。わたしがもっとも関心を寄せたのは、国家および機関レベルでの共通性が存在したことである。わたしが、洞察力に満ち、有用であると感じた12の項目については文末の付録Aに要約してある。これは次節でも議論したい。

エリンボウ(Ellingboe; 1998)による国際化にかんする6つの要素の提示は、彼女自身がアメリカの大学で行ってきた研究の成果である。このうちの5つの要素である、1)教員の国際的活動への参画、2)カリキュラムの国際化、3)留学、4)留学生と外国人研究者、および5)大学のリーダーシップは、ほとんどの国際化にかんする論文で引用され、全米規模での比較のさいの、主要な要素とされている。IQRPに関するOECD文書の著者であるナイトとデ・ウィット(Knight and De Wit; 1999)は、カテゴリーこそ多少の違いはあるものの、同じ要素を指摘している。彼らは、エリンボウのいう「リーダーシップ」を「組織的支援」ならびに「国際的戦略および政策」と表現している。学術プログラムと学生は組み合わさっているし、教員の参画は、研究および学問のコラボレーションというコンセプトによって表現されている。ナイトとデ・ウィットは、これらの要素に、「人材マネジメント」および「外部資金とサービス」を追加している。

ペイジとメステンハウザー(Paige and Mestenhauer; 1999)は、とくにカリキュラムに焦点をあて、カリキュラムを国際化させるための特性を詳細に提示している。彼らによれば、国際化は、文化交流的、学際的、比較的、グローバル的ならびに統合的な学習機会を提供する。さらに、メス

テンハウザー( Mestenhauser; 2002 )は、国際化に関する幅広い見識を通して、「プロセスを監視・評価するメカニズム」、「予算と財源の配分」、「広報活動」、「学生の国際的活動への参画に対する奨励」、「国際化を維持するための枠組み」を考慮すべき要素として付言している。

また、専門職協会でも国際化の観点を重視している。AUCQ( 1995b )は、国際理解教育における主要素として、地方ならびに連邦の政策と同様に、機関の政策、学術的政策、研究機会ならびにコミュニティ支援を挙げている。また、国際化に関連する教養科目研究に積極的にかかわり、もっとも影響力のある高等教育機関でもあるACE( the American Council on Education; 米国教育協議会 )は、最近の刊行物 Green and Olson , 2003 )のなかで、8つの要素を提示している。さらに、ACEは、さまざまな国際化活動のなかでの関連性ならびに相乗効果を探る事の重要性にとくに注目している。加えてACEは、機関が国際化を支援しうる手段は、ミッション、ゴールおよびビジョンの相互連関、戦略的計画、および国際的構造・政策であることを明確にしている。

次に、大学が実際にどのようにして国際化へのアプローチを行っているかをみてることにする。ここでとりあげる5つの大学はひとつの大学コンソーシアムを形成している。カナダにあるブリティッシュ・コロンビア大学( The University of British Columbia )は、2000年に作成した『21世紀へのかけはし：ブリティッシュ・コロンビア大学における国際化( *Bridge to the 21<sup>st</sup> Century: Internationalization at UBC( University of British Columbia ,2000 )* )』のなかで、国際化に必要な5つの要素を提示している。それらは、1)人的資源、2)留学生ならびに外国人研究者の採用、3)国際的研究の率先、4)財源、および5)大学における国際的ミッション、行動指針ならびに優先順位である。ペイジ( 2003 )のミネソタ大学におけるケース・スタディでは、留学生と外国人研究者、カリキュラム、国際的活動への教員の参画、国際化に関連した複合部署( たとえば、学生寮 )、そしてこれらの項目を維持してきた国際化の側面をもったリーダーシップに関する25年間にわたるプロジェクトが描かれている。オーストラリアにあるバララット大学( the University of Ballarat )( 2003 )は、主要なパフォーマンス・インディケータを「国際的に理解できる範囲( international reach )」と呼び、実際に開発してきた大学である。留学生、留学生からの収入、交換留学生、教職員の国際的経験、ならびにカリキュラムの国際的関連性という分野において、固有のインディケータが開発されてい

る。またカナダのレジナ大学(the University of Regina)(2003)は、国際化に関する専門調査会を立ちあげた。同大学専門調査会は、教育、研究、ならびに社会貢献の分野での国際化を整理・体系化した。これら教育、研究、ならびに社会貢献という要素は、北米の大学での基礎的ミッションに相当するが、このケースでは国際化の性質が強い。そこで、同専門調査会は、教育、研究、ならびに社会貢献の次のミッションとして、国際化に関するミッションとビジョンをもった理念を体系化することとした。最後にとりあげる大学は、スウェーデンのマルメ大学(Malmö University)である。マルメ大学は設立以来国際的色彩の強い大学という点で、とても興味深いケースといえる。ニルソン(Nilson, 2003)によれば、マルメ大学はみずからをより特色ある国際的大学に位置づけるために、以下に挙げる点を強化していた。それらは、カリキュラムの国際化、教職員ならびに学生の海外派遣、教職員ならびに学生のためのプログラムの開発、教員の国際的活動への参画、教職員ならびに学生間の二ヶ国語の活用、および“Internationalisation at Homeプログラム(以下IaHと表記)”である。IaHとは、ヨーロッパをはじめ各地で大きな注目を集めたマルメ大学の呼び物である。IaHのコンセプトは、国際化を留学などの移動を伴う計画に頼るべきではなく、むしろ学生の多くが留学しないであろうという事実を考慮しなくてはならない、ということに基づいている。したがって、大学は留学生でない自国の学生にも国際的な学習経験を与える方法を模索しなければならない。マルメ大学は、このような状況を踏まえて、言語教育、文化交流コース、ならびに移民コミュニティ周辺での経験などを通したカリキュラムを強化している。

インターナショナル・フィフティ・コンソーシアム(The International Fifty Consortium)(Marden and Engerman, 1992)は、国際化を最優先課題としたアメリカにある52の私立四年制リベラル・アーツ・カレッジからなるグループである。同コンソーシアムは1991年に設立され、メンバー校は、留学生比率、教職員および学生の国際的活動の参画、国際的領域での学位授与数、さらに国際的領域での大学院進学率が高い比率を占めることなど、特定の条件を満たさねばならない。

さて、この節の締めくくりとして、わたしがこの半年間(2003年9月から2004年3月まで)滞在した日本での国際理解教育を考察することとする。さまざまな研究成果が明らかにしているように(cf. Ebuchi, 1989; Ebuchi, 1997; Horie, 2002, 2003; Umakoshi, 1997)日本では留学生の増

加によって、国際化を展開してきたようである。これは他の国と比べると、独特な展開といえる。日本には、1983年に開始された「留学生受入れ10万人計画」がある。同計画は、他の先進諸国に比べ、際立って少ないとされた留学生の受入れ数を拡大するために始められ、21世紀初頭までに、10万人を受入れることが計画された。同計画の理論的側面から、留学生がなんらかの作用を及ぼすことが期待された。すなわち、日本人学生が、外国人留学生との交流を通じて、新しい知見を獲得し、教室はより国際的学習にふさわしい場となり、大学は適切な支援基幹施設などを発展させるに違いないとの期待である。同計画は2001年に達成されたにもかかわらず、国際化を促進するにあたって、この部門(同計画)だけに依存してしまうことの有効性については、多くの問題点が提起された。「留学生受入れ10万人計画」での目標が達成された今、日本が今後どのようにして国際化を果たして行くのが最大の関心となるであろう。

## 6. 国際化のモデル - 「鍵となるパフォーマンス・インディケータ」

本節では、文献レビューによって明らかにされたことを、下表1に「鍵となるパフォーマンス・インディケータ」として示し、国際化モデルを提示する。次に表2において、表1に示したモデルのパフォーマンス評価作業を可能とするパフォーマンス・インディケータを示すこととする。

表1. 国際化のモデル

鍵となるパフォーマンス・インディケータ
1. 国際化に関する大学のリーダーシップ
2. 国際化に対する戦略的計画
3. 国際理解教育の制度化
4. インフラ整備 - 専門的国際理解教育部門ならびにスタッフ
5. カリキュラムの国際化
6. 留学生ならびに外国人研究者
7. 留学
8. 国際的活動への教員の参画
9. 大学生活 - 複合領域プログラム
10. 評価方法

本モデルでは、第1のカテゴリーとして「大学のリーダーシップ」が挙



げられている。これは、国際化支援のためのリーダーシップを発揮していく学内のさまざまな役職の人を指している。大学の学長、副学長ら上層部によるリーダーシップは、大学全体図においては確かに重要な一面であるが、学部、学科、ならびに他部門など、さまざまなレベルにおけるリーダーシップもまた存在するはずである。第2のカテゴリーである「戦略的計画」は、国際化をしていくための手段を示すものなので重要である。先にも述べたように、戦略的計画は、目標、目的、投入、行動、明確な目標、ならびに期限から構成される。国際化のために、優良な戦略的計画は不可欠である。ペイジ(2003)はミネソタ大学教育人間発達学部の戦略的計画に関して、次のように述べている。1991年に作成された計画に関する文書は「1990年代をとおした国際化を導き、そして(国際理解教育)委員会の活動に対して、強い目的意識を与え注目を集めることとなった(60)」と。第3のカテゴリーである国際理解教育の制度化も、国際化を持續させていくために重要なものである。大学に国際化に関する運営機関があれば、進捗が成功する可能性はより高まるであろう。第4のカテゴリーである「国際理解教育のためのインフラ整備」は、留学生、外国人研究者、留学、国際的助成金ならびに外部資金、およびファカルティ・デベロップメントといった国際化の明確な側面を担う専門スタッフや部署を指す。多くの国々で、適切な学術的トレーニングを受け、数年にわたる国際理解教育の経験をもった専門スタッフが必要とされる高い専門的活動として認められている。

次に第5のカテゴリーとして「カリキュラム」が挙げられる。文献レビューによって明らかにされたことであるが、どの文献にも一貫して、国際化がもたらす成果の核心として「カリキュラム」を位置づけている。基本的に、大学は学生のため、彼らが学ぶために存在している。それゆえ、カリキュラムは高等教育の意図としている大学の理念を具現化するものである。もし、教育が国際的性質を帯びているのであれば、国際化が価値のあるものであるというメッセージが伝わり、学生が第二外国語を習得したり、留学したりといった数多くの学習経験を与えられたのちに大学を卒業できよう。第6のカテゴリーである「留学生ならびに外国人研究者」は、とくに教室の内外で留学先の学生と交流することで国際化への重要な役割を果たすに違いない。もし、留学生ならびに外国人研究者が専門スタッフによって適切な支援・援助を受けながら大学生活に順応できれば、留学生たちの反響はより大きなものになるであろう。第7のカテゴリーは「留学」である。わたしが考察した文献や、調査した大学ではいずれも「留学」を

国際化の主要な観点として位置づけている。「留学」をカリキュラムと関連づけることは留学プログラムを成功へ導く鍵の一つである。第8のカテゴリーである「教員の国際的活動への参画」である。教員は、カリキュラムを作成するうえで欠かせない存在である。教員が国際的活動へ参画すればするほど、留学生らとともに、教員はより効果的にみずからのコースや研究へ国際的要素を組み入れることになる。国際会議や研究留学といった国際的活動への教員の参画を支援している大学は、ファカルティ・デベロップメントおよび機関の幅広い国際化を実施するであろう。第9のカテゴリーである「大学生生活と複合領域プログラム」は、教室の外での大学生生活を取り巻く環境に関連するものである。キャンパスで国際的なイベント(たとえば、コンサート、ダンスパーティ、講演)は開催されているだろうか?留学生と自国の学生が、形式ばらずに、つきあい程度に出会う場所はあるだろうか?国際的課題に関心をもった学生のためのクラブや組織は存在するであろうか?国際的学習を啓発させるような寄宿舎はあるだろうか?キャンパスに国際的雰囲気をもたせることが、国際化に大きく貢献するために必要である。最後のカテゴリーとなる第10のカテゴリーは「評価方法」である。国際化の進捗状況を把握する為に検証システムをもつことが重要となる。もし、パフォーマンス・インディケータ、データ収集、データ分析、および改善に対する意思決定に責任をもつものがいなければ、国際化に関する基本方針は遂行されることはないだろう。

## 7. 国際理解教育におけるパフォーマンス・インディケータ

本稿の締めくくりとして、パフォーマンス評価で活用可能な国際理解教育に関するインディケータを示したいと思う。これらインディケータは次のような3つの方法で検証される。まず第1に、存在するか、しないか?(たとえば、留学生のための部署(International Student Office)はあるか?)第2に、これらインディケータの多くが「過去数年間でX(たとえば予算)は増加しているか、減少しているか?その額はいくらだったか?」という質問を加えることによってベンチマークとして機能するかどうか?第3に「現実(X(たとえばInternational Office)を国際化していくようなX(たとえば国際理解教育スタッフのための雇用基準)の具体的特長はなんであるか?」といった質問によって、質的、およびより説明的な要素を評価へ組み入れることができる。(パフォーマンス・インディケータは文

末の付録へ示す)

最後に、わたしは、国際化とは継続的なものであり、組織全体に及ぶものであり、非常に複雑なプロセスであり、高等教育改革の一領域を担うものであるというエリンボウ(1998)やその他の論者の見解に対して賛成せざるをえない。つまり、国際化は迅速、安易、しかも安価では達成できないのだ。けれども、長年にわたりわたしと共に働き、言葉を交わしてきた国際化に携わる教育者、留学生、ならびに自国の学生たちは、わたしに「国際化とは取り組むに価値がある」ことを確信させてくれたのである。

### 参考文献

- Association of Universities and Colleges of Canada (1995a) "A Primer on Performance Indicators"; *Research File*, vol.1, pp.1-8.
- Association of Universities and Colleges of Canada (1995b) *Internationalization and Canadian Universities*, AUCC.
- Brennan, J., & Shah, T. (2000) *Managing Quality in Higher Education: An International Perspective on Institutional Assessment and Change*, OECD, Society for Research into Higher Education, and Open University Press.
- Brown, S., & Glasner, A. (ed.) (1999) *Assessment Matters in Higher Education*, OECD, Society for Research into Higher Education, and Open University Press.
- Callan, H. (ed.) (2000) *International Education: Towards a Critical Perspective*, European Association of International Education and Drukkerij Rad-draaier.
- Crowther, P., Joris, M., Otten, M., Nilsson, B., Teekens, H., Wächter, B. (2000) *Internationalisation at Home: A Position Paper*, European Association of International Education and Drukkerij Raddraaier.
- Currie, J., & Newson, J. (ed.) (1998) *Universities and Globalization: Critical Perspectives*, Sage.
- Currie, J., DeAngelis, R., de Boer, H., Huisman, J., & Lacotte, C. (2003) *Globalizing Practices and University Responses: European and Anglo-American Differences*, Praeger.
- Ebuchi, K. (1997) *Daigaku Kokusaika no Kenkyu* [Study on the Internationalization of Universities], Tamagawa Daigaku.
- Ebuchi, K. (1989) "Foreign Students and Internationalization of Higher

- Education: A View from the Japanese Perspective”, Ebuchi, K. (ed.), *Foreign Students and Internationalization of Higher Education: Proceedings of OECD/Japan Seminar on Higher Education and the Flow of Students*, RIHE, Hiroshima University, pp.45-56.
- Ellingboe, B. J. (1998) “ Divisional Strategies to Internationalize a Campus portrait: Results, Resistance, and Recommendations from a Case Study at a U.S. University ”, Mestenhauser, J. A. & Ellingboe, B. J. (ed.), *Reforming the Higher Education Curriculum: Internationalizing the Campus*, The American Council on Education/Oryx Press, pp.198-228.
- Enders, J., & Fulton, O. (ed.) (2002) *Higher Education in a Globalising World*, Kluwer.
- Erwin, T. D. (1991) *Assessing Student Learning and Development: A Guide to the Principles, Goals, and Methods of Determining College Outcomes*, Jossey-Bass.
- Green, M. F., & Olson, C. (2003) *Internationalizing the Campus: A User’s Guide*, American Council on Education.
- Grunzweig, W., & Rinehart, N. (ed.) (2002) *Rockin in Red Square: Critical Approaches to International Education in the Age of Cyberculture*, Lit Verlag.
- Horie, M. (2003) *International Students and Internationalization of Higher Education in Japan: Interpretive Study with Policy Makers and International Educators*, Unpublished doctoral dissertation, University of Minnesota
- Horie, M. (2002) “ The Internationalization of Higher Education in Japan in the 1990s: A Reconsideration ”, *Higher Education*, vol.43, pp.65-84.
- Knight, J. (2002) *Developing an Institutional Self-Portrait Using the Internationalization Quality Review Process Guidelines*, <http://www.eotu.uiuc.edu/events/IQRP-SelfPortrait.pdf> (2005/02/14)
- Knight, J., & de Wit (ed.) (1999) *Quality and Internationalization in Higher Education*, OECD.
- Marden, P. G. & Engerman, D. C. (1992) “ International Interest: Liberal Arts Colleges Take the High Road ”, *Educational Record*, Spring, pp. 42-46.
- Mestenhauser, J. A. (2002) “ In Search of a Comprehensive Approach to International Education: A Systems Perspective ”, Grünzweig, W. & Rinehart, N. (ed.), *Rockin in Red Square: Critical Approaches to International Education in the Age of Cyberculture*, Lit Verlag, pp.165-

213.

- Mestenhauser, J. A. (2000) "Dual Functions of International Education Professionals: In Search of Their Knowledge Base", Callan, H. (ed.), *International Education: Towards a Critical Perspective*, European Association of International Education and Drukkerij Raddraaier, pp.31-50.
- Mestenhauser, J. A. (2000) "Missing in Action: Leadership for International and Global Education for the Twenty-First Century", UNESCO-CEPES (ed.) *Internationalization of Higher Education: An Institutional Perspective*, UNESCO-CEPES, pp.23-62.
- Mestenhauser, J. A. & Ellingboe, B.J. (ed.) (1998) *Reforming the Higher Education Curriculum: Internationalizing the Campus*, The American Council on Education / Oryx Press.
- Nilsson, B. (2003) "Internationalisation at Home from a Swedish Perspective: The Case of Malmö", *Journal of Studies in International Education*, vol.7, pp.27-40.
- Paige, R. M. (2003) "The American Case: The University of Minnesota", *Journal of Studies in International Education*, vol.7, pp.52-63.
- Paige, R. M. & Mestenhauser, J. A. (1999) "Internationalizing Educational Administration", *Education Administration Quarterly*, vol.35, pp.500-517.
- Paige, R. M. (ed.) (1993) *Education for the Intercultural Experience*, Intercultural Press.
- Paige, R. M. (1993) "On the Nature of Intercultural Experiences and Intercultural Education", Paige, R. M. (ed.) *Education for the Intercultural Experience*, Intercultural Press, pp.1 - 19.
- Siaya, L. & Hayward, F. M. (2003) *Mapping Internationalization on U.S. Campuses*, American Council on Education.
- Stromquist, N. P. & Monkman, K. (ed.) (2000) *Globalization and Education: Integration and Contestation Across Cultures*, Rowman and Littlefield.
- Umakoshi, T. (1997) "Internationalization of Japanese Higher Education in the 1980s and early 1990s", *Higher Education*, vol.34, pp.259-273.
- University of Ballarat (2003) *Key Performance Indicators 2003-2004*, University of Ballarat. [<http://www.ballarat.edu.au/vc/planning/>] (2005/02/14)
- University of British Columbia (2000) *Bridge to the 21st Century: Internationalization at UBC*, University of British Columbia. [<http://www>.

trek2000.ubc.ca/supp\_docs/bridge.html] (2005/02/14)  
 University of Regina (2003). *Task Force on Internationalization*, University of Regina.  
 [http://www.uregina.ca/presoff/vpresearch/Task%20Force%20Internationalization/Final%20Task%20Force%20Report.pdf] (2005/02/14)  
 USAID (1996) “Selecting Performance Indicators”, *TIPS*, vol.6, pp.1-4.

### 付録A．国際化の概念

<p><u>Ellingboe( 1998 )</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 . 大学のリーダーシップ</li> <li>2 . 教員の国際的活動への参画</li> <li>3 . カリキュラムの国際化</li> <li>4 . 学生のための国際的学習および研究の機会</li> <li>5 . 大学生生活に順応した留学生および外国人研究者</li> <li>6 . 留学生に関する業務ならびに複合領域部門</li> </ol>	<p><u>Knight and de Wit( 1999 )</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 . 背景</li> <li>2 . 国際化に関する戦略および政策</li> <li>3 . 組織体系および支援体制</li> <li>4 . アカデミック・プログラムおよび学生</li> <li>5 . 研究および学術のコラボレーション</li> <li>6 . 人材開発マネジメント</li> <li>7 . 契約とサービス</li> </ol>
<p><u>Paige &amp; Mestenhauer( 1999 )</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 . 統合的要素</li> <li>2 . 文化交流的要素</li> <li>3 . 学際的領域要素</li> <li>4 . 比較的要素</li> <li>5 . 知識および技術的要素の移動</li> <li>6 . 状況的要素</li> <li>7 . 全世界的要素</li> </ol>	<p><u>Mestenhauer( 2002 )</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 . 包括的国際理解教育政策</li> <li>2 . 評価のメカニズム</li> <li>3 . 戦略的計画</li> <li>4 . 運営組織</li> <li>5 . 予算ならびに経費の分配</li> <li>6 . ファカルティ・デベロップメント・プログラム</li> <li>7 . カリキュラムの国際化</li> <li>8 . 国際理解教育への学生の参加を促す制度</li> <li>9 . 国際理解教育の広報</li> <li>10 . 持続性</li> </ol>

<p><u>AUCQ (1995b)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 機関運営政策</li> <li>2. 学術的政策</li> <li>3. 研究機会</li> <li>4. コミュニティ・サービスならびに課外活動</li> <li>5. 州政府の政策</li> <li>6. 連邦政府の政策</li> </ol>	<p><u>ACE (Green &amp; Olson, 2003)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 公約：ミッション、目標、ビジョン</li> <li>2. 戦略および戦略的行動計画</li> <li>3. 構造、政策、および実践</li> <li>4. カリキュラムおよび複合領域</li> <li>5. 留学および海外インターンシップ</li> <li>6. 諸外国の機関との業務提携</li> <li>7. 大学文化</li> <li>8. 個別的行動での相乗効果ならびに関連</li> </ol>
<p><u>University of British Columbia-Canada (2000)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 個人と人材</li> <li>2. 外国人研究者ならびに客員教授の採用</li> <li>3. 国際的分野での研究の率先</li> <li>4. 財源：国際的資金調達へのアクセス</li> <li>5. 国際的褒賞および資金</li> <li>6. ミッション、行動指針、ならびに優先順位</li> </ol>	<p><u>University of Minnesota-USA (Paige 2003)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学生生活における留学生ならびに外国人研究者の統合</li> <li>2. カリキュラムの国際化</li> <li>3. 国際的活動における教員の参画</li> <li>4. 国際化に関連した複合部署</li> <li>5. 国際理解教育を支援するリーダーシップ</li> <li>6. 留学プログラム</li> </ol>
<p><u>University of Ballarat-Australia (2003)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 留学生</li> <li>2. 留学生からの収入</li> <li>3. 交換留学生</li> <li>4. スタッフの国際的経験</li> <li>5. 国際的カリキュラム</li> </ol>	<p><u>University of Regina-Canada (2003)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教育</li> <li>2. 研究</li> <li>3. 社会貢献</li> <li>4. 国際化に関するミッションおよびビジョン</li> </ol>
<p><u>International 50-USA (Marden &amp; Engerman, 1992)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 留学</li> <li>2. 留学生</li> <li>3. 教員の国際的活動への参画</li> <li>4. 地域研究、国際的領域の研究、および外国語分野領域での学士記の授与</li> <li>5. 地域研究、国際的領域の研究、および外国語分野領域でのPh.D.学位の授与</li> </ol>	<p><u>Malmö University-Sweden (Nilson, 2003)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. カリキュラムの国際化</li> <li>2. スタッフおよび学生の流動性</li> <li>3. スタッフおよび学生の資質向上</li> <li>4. 自大学での国際化</li> <li>5. 教員の国際的活動への参画</li> <li>6. 教職員および学生の二ヶ国語の活用</li> </ol>

### パフォーマンス・インディケータ1：国際化に関する大学のリーダーシップ

- A．ミッション・ステートメント
- ・大学のミッションに国際理解教育が含まれている。
  - ・大学のミッションとして国際理解教育が最優先項目に設定されている。
- B．広報
- ・教職員および学生のための国際理解教育の機会があることを記した資料がある。
  - ・学長がスピーチのなかで国際理解教育に対して言及している。
- C．予算
- ・大学が国際的活動、スタッフおよびオフィスへの予算を計上している。
- D．リーダーシップの位置付け
- ・大学が国際理解教育の運営組織をもっている。
- E．昇進とテニュア
- ・教員に国際的活動に対して昇進し、テニュアを獲得する権利がある。
  - ・教職員の採用にあたって国際的経験を考慮している。
- F．学生の募集
- ・大学生活のなかで国際理解教育があることを学生募集のなかで謳っている。

### パフォーマンス・インディケータ2：国際化の戦略計画

- A．目標
- ・計画に大学の目標として国際理解教育を設定する。
  - ・計画に学部および学科の目標として国際理解教育を設定する。
- B．目的
- ・計画に大学の目的として国際理解教育を設定する。
  - ・計画に学部および学科の目的として国際理解教育を設定する。
- C．財源および人材の投入
- ・計画に国際的活動のための予算を計上する。
  - ・計画に国際的活動のための人材を投入すること。
- D．行動
- ・計画に大学に対して国際化を促す具体的行動を記載すること。
  - ・計画に学部および学科の対して国際化を促す具体的行動を記載すること。
- E．期限と具体的目標
- ・計画は国際化に対する期限と具体的目標を設定すること。

### パフォーマンス・インディケータ3：国際理解教育の組織化

- A．委員会
- ・大学は国際理解教育に責任をもつ委員会を大学レベルで設立すること。
  - ・大学は国際理解教育に責任をもつ委員会を学部および学科レベルで設立すること。



B. 説明責任

- ・大学に国際的活動に関するデータ収集ならび分析に関する専門家がいないこと。
- ・大学に期限と具体的目標達成のための責任者がいないこと。
- ・大学に国際化の進捗状況を評価するための検証方法がないこと。

パフォーマンス・インディケータ4：支援インフラ - 国際理解教育に関する専門的部門ならびにスタッフ

A. 留学生および外国人研究者

- ・大学に留学生および外国人研究者をケアする部門があること。
- ・大学は適切なスタッフに同部門を運営させること。

B. 留学

- ・大学に学生の留学手続きを請け負う部門があること。
- ・大学は適切なスタッフに同部門を運営させること。

C. 国際的交流、プロジェクト、資金、契約

- ・大学の主導権を支援する国際プログラムに関する部門があること。
- ・大学は適切なスタッフに同部門を運営させること。

パフォーマンス・インディケータ5：カリキュラムの国際化

A. 国際的領域に関する主専攻

- ・学士課程において、地域研究、国際的研究、ならびに外国語といった国際領域に関する主専攻を設置すること。
- ・大学院課程においても国際的領域に関する主専攻を設置すること。

B. 国際的領域に関する副専攻

- ・学士課程において、国際的領域に関する副専攻を設置すること。
- ・大学院課程においても国際的領域に関する副専攻を設置すること。

C. 国際コース

- ・学士課程において、国際コースを必修(たとえば、国際政治など)とした「コア・カリキュラム」を実施すること。
- ・大学院課程においても、国際コースを必修とすること。

D. 言語

- ・学士課程において第二外国語を必修とすること。
- ・学士課程の卒業要件として語学の習熟を盛り込むこと。
- ・大学院課程においても第二外国語を必修とすること。
- ・大学院課程の研究要件として語学の習熟を盛り込むこと。

E. 奨学金および褒賞

- ・学士課程の学生の留学にさいして、奨学金および褒賞制度があること。
- ・大学院課程の学生の留学にさいして、奨学金および褒賞制度があること。

F. 手段(リソース)

- ・大学に国際理解教育に関するカリキュラム委員会が設置されていること。

- ・大学に国際コースを開発するための予算があること。
- ・大学に国際的カリキュラム開発のための資金プログラムがあること。
- ・国際的カリキュラム開発のために、教員にたいして十分な時間を与えられること。

#### パフォーマンス・インディケーター6：留学生および外国人研究者

- A．留学生の募集
- ・大学に留学生のための奨学金および褒賞制度があること。
  - ・大学に留学生募集に関する戦略的計画があること。
  - ・大学に留学生に対する学費免除制度があること。
- B．留学生支援
- ・大学に留学生オフィスが設置され、アドヴァイザーがいること。
  - ・大学に留学生のためのオリエンテーション・プログラムがあること。
  - ・大学に留学生のための第二言語プログラムがあること。
- C．留学生の大学生活への適応
- ・大学に教育資源として留学生を活用する学術プログラムがあること。
  - ・大学にホームステイ・プログラムといった、留学生のための複合領域プログラムがあること。

#### パフォーマンス・インディケーター7：留学

- A．学術的留学
- ・大学が単位取得を伴った留学プログラムをもっていること。
- B．インターンシップおよび観光
- ・大学がインターンシップや観光プログラムといった大学で学習を伴わない留学プログラムをもっていること。
- C．学術的留学の特殊化
- ・大学が固有の学部や学科のために設計された学術的留学プログラムを持っていること。
- D．必修科目としての留学
- ・いくつかの学部および学科には、留学として必修科目があること。
- E．交換留学制度
- ・大学が協定大学との交換留学制度をもっていること。
- G．学生支援
- ・大学に留学する学生のための奨学金制度があること。
  - ・大学に留学する学生のための、出発前、滞在中、および帰国後のプログラムがあること。

パフォーマンス・インディケータ8：国際的活動への教員の参画

A．教員支援

- ・大学が国際学会へ参加する教員ための出張のサポートをしている。
- ・大学が、教員が留学プログラムへ参加するための資金援助を行っている。
- ・大学が、海外での教育および研究への関心をもっている教員へのオリエンテーション・プログラムをもっている。

B．交換留学および就労制度

- ・大学が、教員が海外で働くことのできるよう協定大学へ働きかけを行っている。

C．国際的外部資金および契約

- ・大学は、教員の国際的外部資金および契約のために、教員にたいして十分な時間を与えられえること。
- ・大学は、大学が提供した開発プロジェクトのために、教員にたいして十分な時間をあたえること。

パフォーマンス・インディケータ9：大学生活および複合領域プログラム

A．学生生活関連部門

- ・大学が、国際的學生生活および国際的學生生活に関連したことがらを受け入れる部門をもっている。

B．学生組織

- ・大学が国際的ことがらに関する学生組織をもっている。
- ・大学が国際的活動を支援するために学生組織にたいして資金提供を行っている。

C．学内でのプログラム

- ・大学がキャンパス内で国際的および文化交流的プログラムを提供している。
- ・大学が学生にたいして国際的リーダーシップの機会を与えている。
- ・大学が国際的に活躍する人材を提供するプログラムおよび助言活動を実施している。
- ・大学が留学生および自国の学生の双方が一緒に生活するための寄宿舎をもっている。
- ・カフェテリアでさまざまな国の料理が提供されている。
- ・留学生がざっくばらんに交流できるラウンジがある。

パフォーマンス・インディケータ10：評価方法

A．パフォーマンス評価のプロセス

- ・大学に適切な順番で実施されるパフォーマンス評価プロセスがある。
- ・大学にパフォーマンスをモニターするための部門が定められている。

B．パフォーマンス・インディケータ

- ・大学が国際化のためのパフォーマンス・インディケータを開発している。

C．パフォーマンスの評価

- ・ 大学に毎年国際化のパフォーマンスを内部評価するシステムがある。
- ・ 大学に5～10年おきに国際化に関する活動を外部評価するシステムがある。
- ・ 大学に評価を報告する予定表が定められている。
- ・ 大学に年次報告書の評価、将来の行動計画にたいしての助言、および戦略的計画を改訂するための助言にたいする責任組織が存在する。